

神戸紅茶 (神戸市東灘区) ティーバッグ製造

次の一手

〜激動の中で 兵庫の企業〜

日本で先駆けとされる神戸の紅茶メーカーは今、改革のまっただ中にある。1995年の阪神・淡路大震災が引き金となり経営破綻して14年。取引条件の見直しで赤字体質から脱却し、年功序列を廃止して若手を抜てきするなど新たな挑戦を続ける。

創業は25(大正14)年。前身の会

世界の茶葉を日本に合うブレンドで。

茶葉の鑑定を行う検茶台の横で、経営戦略について語る神戸紅茶の丸山輝真社長(いずれも神戸市東灘区住吉浜町(撮影・辰巳直之))



社が、英リアントン社のOEM(相手先ブランドによる生産を請け負い、日本で初めてティーバッグの機械生産をした。30年前の年商は約52億円。現在の10倍以上の規模で、夜通し工場を稼働させていたという。

ところが、阪神・淡路大震災を機に、リプトンが日本から撤退。さらに、震災で被災した本社工場の再建費用などが響いて、2008年に民事再生法を申請した。16年6月には自動車販売などを手がけるシーライ

オングループ(神戸市中央区)の傘下に入り、17年末、同グループから丸山輝真社長(36)が当時の営業部長として立ち上がった。まず着手したのは、売り上げ至上主義をやめ、利益を生む体質へ転換すること。当時は、年間数千円の赤字を計上し、売り上げの7割を占めるOEMは実質的に採算割れの取引が多かった。取引条件を見直し、経費削減を進めて、19年3月期に黒字化を達成した。

〈データ〉1925(大正14)年、紅茶など食料品卸売業の須藤信治商店として神戸市兵庫区で創業。2006年に現社名。丸山輝真社長は追手門学院大卒。21年4月から現職。22年3月期の売上高は4億8245万円。社員16人。



神戸紅茶の商品

強みは茶葉の味に精通した鑑定士がいること。世界中から仕入れてくる茶葉を日本の水に合うよう自在にブレンドできる。大量生産する大手と違い、収穫量が限られた旬の茶葉だけを厳選して使えるのも利点だ。新たな人材も積極的に採用している。工場長や営業など主要な業務を

担う30代の社員は、いずれも大手企業に内定していた人材を、丸山社長が口説き落とした。7月には紅茶鑑定士の川内雅登さん(31)を執行役員に抜てきする予定。丸山社長は「赤字でも賞与を出し、仕事をしなくても昇進する風土をぶち壊し、成果を評価するようになった」と強調する。こうした方針に反発し、辞めていった社員もあり、今では若手が4割を占めるようになった。昨年は9割以上の社員が過去最高の年収を手にしたという。

3年半後には創業100年を迎える。それまでに経営利益を現在の倍近い1億円に伸ばし、再び直営店を出店する計画だ。「若手が活躍できる舞台が整ってきた。またまた成長できる」(塩澤あかね)

◇原則、毎週末曜に掲載します。